

「収束雲」について

(小倉氏のコメントを読んで)

岡 林 俊 雄

天気 39.4 の小倉氏の収束雲帯についてのコメントを読んで、内容的には以前にも議論した事項が多いが、収束雲と名付けた本人として、まず、要は日本海収束線(帯)上の带状雲を「収束雲」と略称したということである。

少し長い用語を論文・報文中などでは、その用語の定義のあと「以下何々と略称する」とすることは通常よくあることだが、問題はその略語のひとり歩きをどの程度まで許容するかという点にあると思う。たとえば、温帯低気圧はかなりの範囲で「低気圧」という略語でひとり歩きしているが、「収束雲」はひとり歩きさせずに、いつも「日本海収束線上の带状雲」とする必要がある、どの程度要求されるかという現実的問題だと思う。

小倉氏は収束雲帯でなく、cloud band in Japan Sea Convergence zone (JSCZ) とか日本海収束帯の渦列でよいのではないかと言っているが、問題は、しばしば用いる用語の略称をどうするかということで、いつも日本海収束帯の渦列でいくか、適当な略語(ベストではないかもしれないが収束雲がその一つ)でいくかということであろう。

筆者が、日本海側に大雪をもたらす带状雲に「収束雲」という言葉を初めて使ったのは、今からもう25年前の、1967年度気象学会春季大会と同年の北部管区気象研究会であった。そのときは「収束带状雲」または「収束弧状雲」とし、略して「収束雲」と呼称するとした。

2年後の1969年の天気 16.2 に、衛星から見た収束雲とそれをもたらす“日本海収束線”について記述したら、かなりの反響と論議がおこり、討論のきっかけにということで、神子敏郎氏(当時同じ気象庁予報部)との間で、同年の天気 16.5 の〔通信欄〕で紙上討論をおこなった。

神子氏の「収束雲」批判に対して、筆者は『丁寧には「収束線上の带状雲」ということで、当初は収束带状雲

としてましたが、何度も使う時はさらに短かく収束雲と呼称するようになりました』と応えた。

次に筆者は、気象研究ノートの気象衛星特集号(113号、1972年)で、『日本海にはしばしば太い带状雲が現われるが、……この带状雲が両側の雲(主に筋状雲)と様相を異にし、周囲よりひときわ強い気流の収束(線)または不連続線上に発生しているとみなされるとき、それを特に収束带状雲、略して収束雲と名づけることにした』と述べている。要約すると収束雲とは、日本海上の収束線(帯)上の带状雲の略称であるということである。

略称にもいろいろの表現があろうが、「収束雲」としたもう一つの理由は、気象衛星から見ると、両側(時には片側)の筋状雲が、中央の带状雲に向って、束のように集合(収束)している形状を示すことが多いので「収束雲」で形状も示唆できると考えた次第である。収束雲の最初の典型例として、天気 16.8 (1969) に載せた衛星写真(33頁)をご覧いただきたい。

しかし、「収束」という言葉を冠したことには、どうも問題があったことは自認している。それは、大部分の雲は気流の収束域にできることは当りまえのことなのだから、ことさらに「収束雲」はおかしいということであろう。しかし、筆者は、そのような意味で収束雲としたのではないことは前述のとおりであるが、ベストではなかったと今でも感じている。

なお、当初収束雲をCBC(Convergent Band Cloud)、日本海収束線(帯)をJSCZと略することも考えたが、アルファベットの略語氾濫に少なからず抵抗感を持っていたので、取り止めた経由もあった。

日本海収束線(帯)上の带状雲を略して収束雲、それを使ってから25年。この間、日本海側の降雪の研究分野で、多数の研究者が大雪をもたらすこの収束雲という雲帯に関する研究にとり組み、この言葉は論文や報文中に

少なからず活字になっているのが現実である。

そして、収束雲では省略形すぎると考える研究者は、論文の冒頭で適宜註釈を付加している。筆者も、収束雲がベストとは考えてないが、25年間、降雪研究分野でそれなりの役割を果たしてきたとみなしている。しかし、3～5字でひとり歩きのできる、より適切な略語の提案と

出現を期待している。

今回の小倉氏のコメントを読んで、内容的にうなずける点もあるが、25年間の位相差を感じている。そして、博識な氏に今迄この分野で一度も接触の機会が無かったことを残念に思っている。